
名探偵の終着路（プロセス） ～重なったanother～

真知歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵の終着路 プロセス 重なったanother

【Nコード】

N8851X

【作者名】

真知歌

【あらすじ】

『闇に放つ銀の弾丸』 シルバー・プレット 『続編…虹を掛ける愛の矢』 キュービッド に続く最終編！黒の組織を完全に破滅に導き、遂に待ちに待った新一と蘭の結婚式、幸せいっぱい！の結婚式のはずが… 突如現れる謎の人物！？CIA諜報員として活躍する探偵団は必死に守ろうとする…。その時反射的に灰原（宮野志保）を守った新一… 「ねえ…どうして新一…？」

関東で起きる連続殺人事件の容疑者…またあの男が帰ってくる…！？

結婚式に乱入し式を中断させた人物とは！？

そして再び現れる江戸川コナン：

彼は一体なぜ…！？

「私はあなたを幼児化させた薬の開発者よ？」

「時の流れに逆らえば人は罰を受ける… 工藤くん…残念ながら恋愛も同じよ？」

窮地に立たされたコナンが下した決意とは…！？ 本音とは…！？

コ哀派感動のストーリー、最終編

「新一、好きだよ…」

「工藤くん…好きよ？」

お見逃しなく！！！！

祝福の珍事（前書き）

江戸川コナンから工藤新一に戻り
一年が経った春：

二人はチャペルで結婚式を挙げていた

祝福の珍事

パ
パ
パ
パ
ー
ン
ッ
ッ

扉の向こうには新婦、蘭が小五郎と腕を組み立っている
それを前で待つ新一

有希子「新ちゃん、おめでと〜」

光彦「おめでとうございます!!」

灰原「なかなか似合うわね? そのタキシード」

色々と皆から言われ照れ臭そうにする新一

扉の向こうから小五郎と来るであろう蘭、それを待ち扉に目を向けると側にいた目暮警部が目に入った

もちろん知人の息子として警察の協力者として参加しに来てくれているのだろう…

そう思う新一…

その隣には佐藤刑事と高木刑事もいた

新一（ん? どうしたんだろう…）

だが警部達の目付きはとても祝福の場とはかけ離れ、いつもの犯人を捕まえようとしている刑事の目付きだった

不思議に思う新一、目の前の扉が開き蘭と小五郎が歩いてくる

英理「おめでとう、蘭」

蘭「ありがとう!」

歩美「蘭お姉さん、とっても綺麗!!」

蘭「そうかな…? ありがとう!」

新一も蘭のウエディングドレス姿に惚れ惚れとしている

すると視線を感じた新一はその視線を発している者の方を見る

新一「なんだよ…」

灰原「探偵さんもそんな顔をする時があるのね?」

蘭に見とれていた新一をからかうように言う

新一「うるせっ!」

顔を赤くしながら小声で灰原に言う

すると照れ隠しからなのかいつものくせでズボンのポケットに手を入れる

……すると次の瞬間!

バーンッ…

一発の銃声がチャペル内を沈黙にさせた

狙われた名探偵

銃声を響かせたのは佐藤刑事だった

佐藤刑事の撃った弾は新一の足元のタイルに埋め込まれた

新一をはじめ周りの人物達は銃声は勿論、その放った弾は新一を狙っていたことに驚く

そしてもう一つ、銃声を聞いた新一はとっさに庇うように灰原を抱き締めていた

灰原「あなた何してるの？」

新一「あ？ああ…！わりい…」

「また組織の残骸が現れたんじゃないかと思って…」

蘭

有希子（あら、新ちゃんったら…）

皆がその新一の行動に咂然としていた

灰原「佐藤刑事どうしたのかしら？」

蘭の視線が痛く新一から離れる

新一「ああ…」

警部達は結婚式に来ていた人達を帰宅へと促し目暮警部と佐藤刑事が新一に歩み寄る

小五郎「警部、一体…」

通り過ぎる目暮を見つめる

目暮警部と佐藤刑事は新一の目の前で止まり曇った表情で佐藤「工藤君…君を関東連続殺人事件の容疑で逮捕する」と言い渡す

当然その言葉に驚きを隠せない一同…
もちろん新一本人も

優作「目暮警部、事情をお聞かせ願えますか？」
冷静な優作は目暮警部に事の経緯を訪ねた

目暮「ああ…実は…」

容疑者の諸事情

するところこ五日間、東京を中心に四件の殺人事件が発生していることが分かった

被害者は皆20歳前後の女性で髪は黒の長髪で清楚な女性：

そして事件現場には犯人の痕跡が全くなく凶器すら見つかっていなかった

博士「しかし何も新一を疑わなくても：

歩美「そうだよ！もし新一お兄ちゃんが犯人だったら：確かに事件現場に痕跡も残さないと思うし黒のロングヘアーで清楚な蘭お姉さんが好きだけど： そんなことはしないもん！！」

新一 おいおい：フオローになってねえよ：

服部「なあ、警部はん？」

「まさか工藤が犯人だと言えるような証拠みたいなもん見つけはったんやろか？」

新一

同じ事を思っていた新一は真剣な表情で目暮警部を見た

目暮「今回の事件の指揮を取っているのは上層部でわしらの意見などともに聞いてもらえなかった：

「工藤君には日頃から世話になってるし、勿論優作君とは知人で工藤君が殺人犯を突き止める事はあっても殺人犯になるような人間でない事は充分承知していた：

蘭「ならどうして新一が：

そう、新一本人も信賴している警部達が間違っても自分を犯人だと

疑うことがあるはずはないと思っていた
だが今日の警部達は何かが違かった

佐藤「見つかってしまったのよ…」

灰原「何が？」

高木「殺人現場の監視カメラに映る工藤君の姿が…」

本人以外は当然驚いている

蘇る偽りの魔

有希子（まさか…新ちゃん…）

優作「そんなはずないだろう？」

元太「おい、新一どうなんだよ！？」

快斗「とうとうやっちまったか？名探偵…」

そんな言葉に最早呆れている新一

新一「何かの見間違いだろ？」

横目で見ながら流すように言う

目暮「いや、それが…」

「その監視カメラに映る君の近くにあったんだ…」

「君の車が…」

新一に戻り18歳になった新一はここ半年で車の免許を取り愛車を所持していた

佐藤「ナンバーも工藤君の車に間違いないわ…」

一同はまた絶句していた

服部「工藤、何かの間違いやろ？」

光彦「新一さん！なんとか言ってください！！」

博士「し…新一？」

蘭「ねえ、新一！何かあるなら黙ってないでちゃんと話して！！」

そう、新一は黙り込んでいた

だが真相を話され追い詰められてしまったからではなく今、新一の

頭の中には恐ろしい事が浮かんでいた

工藤新一と同じ顔や容姿、瓜二つに真似をし復讐のために工藤新一として犯罪を犯し本人を追い詰めるというこの手口……
前にもどこかで……

新一「警部、それは僕ではありません」

「残念ながら犯行時刻のアリバイや証人はいませんが警部達や上層部の人間が納得できるようなお話をさせて頂きたいと思えます」

そう言うと同は真剣な眼差しで新一の方を向く

再び迫る虚像

そして新一はあの事件を話した：

そう、『工藤新一』を恨み新一と同じ顔にし犯罪を犯したあの“屋田誠人”という人物の存在を

この状況から新一にまだ恨みを持ち新一の犯行に見せかけて事件を起こしているというのは一目瞭然だった：

被害者の黒髪のロングヘアーという蘭にそっくりな像もまた警察の目を工藤新一に向けさせるためにやっているのかもしれない：：
ということを皆の前で話した

服部「おいおい、まさかまだお前に恨み持つとるんか！？」

蘭「そんな…」

目暮「そんな事があったのか…」

「でもよかった、工藤君が犯人じゃなくて…」

光彦「当たり前です！！」

高木「やっぱり？まさか工藤君が！？とは思っていたんだけど上からの指示があったとなると僕らの力じゃ止める事ができなくて…」

佐藤「ええ、そうね」

「そういうことなら上に話してその屋田誠人という人物を指名手配するわ？」

優作「お願いします。」

目暮「今日は悪かった…」

「こんな大事な時に…本当にすまない」

有希子「いえ！また挙げればいいのかよ、ね？」

と新一と蘭に笑い掛ける

晴れない心

新一……

とても複雑な気持ちを顔に現わす

蘭「そうですね……」

結婚式は中断になってしまったけど新一の疑いが晴れたならと少し安心したような顔で有希子に返す

警部達は皆に詫びを入れ真犯人逮捕に努めるため素早くその場を退散した

その後残された一同はこの空気で式を続けるのも無理があったため今日は引き上げてまた後日やり直そうという事になった

そして新一と蘭と灰原と探偵団の三人、服部に和葉に園子は一旦博士の家に行く事になった

有希子と優作、英理に小五郎、快斗は他に用事があるためその場で皆とは別れた

快斗「じゃあな名探偵！」

新一「おう、悪かったな快斗！」

そういうと新一達は阿笠邸へと向かった

博士の車の中では皆がほとんど無言だった

新一を始め服部や蘭や灰原に探偵団の三人、和葉やあの園子でさえ
無言で今回の事件のことを考えていた

そして蘭と灰原の脳裏にはもう一つ、

あの時の新一の行動が頭から離れないでいた

晴れない心（後書き）

蘭（なんで新一はあの時…）

（いくら哀ちゃんが狙われていたっていつでも…）

（新一なら私の所に来てくれると思ったのに…）

（ねえ、新一…本当に私で良かったの…？）

灰原（工藤君、あなたのあの行動でどれだけの人が傷ついたり不安がったりしているかあなたには分からないでしょうね…）

（少なくとも、私は迷惑よ…）

（二度決めて進み始めた道に障害物を置かないでほしいわね…）

過酷な談話（前書き）

その頃

林の茂る小屋の中では

あの男が不気味な笑みを漏らし
片手に怪しげな袋を抱えていた

過酷な談話

阿笠邸に着いた一同はソファーに腰をかける

新一は博士に関東連続殺人の詳しい概要を調べるように頼んだ

蘭「新一、これからどうするの？」

新一の性格を知る蘭は新一が今回の事件をこのままにしておくはずがないと分かっていた

新一「ああ、屋田誠人はきっと何らかの理由で俺に恨みがあり今回の犯行を起こした…」

服部「恨みってまだ工藤のこと恨んどるんか？せやかてなんでまた今更…」

新一「いや、前回の事は解決している…」

灰原「ならどうして工藤君を…？」

新一「前の事をまだ恨んでいるのは考えにくい…となると恐らく…」
服部「ま…まさか!？」

新一「ああ、また生まれたんだろうぜ？」

「俺を恨まなければやっていけないようなことが…」

園子「でもまだその屋田って人の仕業かどうかなんて分からないんじゃないの？」

灰原「そうね…？」

新一「いや、この俺を追い詰めるようなやり方…あいつに間違いない…」

「俺の車の車種やナンバーを知っていたとなると多分、俺の近くにいたことも間違いない…」

和葉「うっそ〜!?!怖いわ〜」

新一「くそっ…一体何の恨みがあるんだ…」

この状況からもしかすると蘭にまで危害が及ぶのではないかと危険を感じ新一は一刻も早く犯人を捕まえなければいけない苛立ちに侵されていた

悪魔の境界線

翌日

新一は博士に頼み東奥穂村まで訪れた
助手席に座る新一の手には昨日博士が調べた資料があった

新一は止めたが心配な蘭は二度と新一と離れたくないと思い共に東奥穂村へ訪れた

灰原「恨みの種は組織関係かしら？」
後部座席に座る灰原が言う

その隣には歩美と光彦と元太もいた

新一「その可能性は高いな」

「組織の人間は仕事柄顔も広いし人員は何百人にも及ぶ…」

「屋田誠人が組織の人間の知人や友人だという事も考えられなくはない」

「灰原、気を付けろよ？」

灰原「ええ、分かっているけど…」

「あなた、気にする人を間違っていないかしら…？」

そう言いながら蘭をチラ見する

すると新一は一瞬ここに蘭がいたのを忘れていたかのような顔をする
新一「もちろん蘭もだ」

蘭「うん、でも私は大丈夫…」

新一「屋田誠人が狙う被害者の容姿は蘭にそっくりだ…」

「俺の犯行に見せかけるためとはいえどうもひっかかる…」 蘭、油

断するなよ？」

蘭「うん、ありがと…」

（そうよね…？私は空手もやってるし組織の人間に狙われていた訳でもないし…）

（それに比べたら哀ちゃんは子供の体だしもしまた組織の人間に係っていたとするとかなり危険な状況になり兼ねないものね…）
下を向きそう考える蘭

違和と消沈

確かに二人の身を心配する新一だが

その心配の仕方はどこか違った

それは蘭も灰原もなんとなく気にかけていた

灰原には“気を付けろ”

蘭には“油断するな”

二人とも自分の能力や体力と同等位な者に対する発言だが“油断するな”という言葉は何処か無責任な言い方にも聞こえた

灰原「……………」

すると細い道の反対側からバスが来るのが見えた

博士の車は定員オーバーで乗れない服部と和葉は昨日同様バイクに股がっていた

博士の車の横で東奥穂村に向かっていている二人はバスが来たのを見て博士に『俺が前に出る』と合図した

博士は少しスピードを落とし服部に先頭を委ねる

博士の車とバスがすれ違う―…

新一（……、……？、……！！）

「博士！止まって！！」

その言葉に博士は急ブレーキをかけた

それに気付いた服部のバイクも停車した

キキィーッ！！！！

服部「どないしたんや!？」

車から降りてくる新一に問い掛ける

新一「今、あのバスに屋田誠人が乗ってた…」

博士「!？」

服部「!？」

和葉「!？」

灰原「!？」

光彦「!？」

歩美「!？」

元太「!？」

蘭「私も見た…」

博士「本当かね!？」

蘭「うん、間違いない!あれは屋田誠人さんよ…」

（そう、新一みたいだけど新一じゃないこの変な感じ…間違いないわ）

新一「とにかく、向かう…」

とバスと反対方向を見つめる新一

混乱する心

博士「屋田誠人を追わないのかね!？」

服部「せっかく見つけたんやから追わないでどないすんねん!？」

歩美「新一お兄さん、何か考えがあるの?」

新一「(:!?)」

一瞬コナンでいるような気がした

それもそのはず、歩美の今の発言はコナンに質問するかのようない方だった

歩美「あっごめんなさい!」

「なんかコナン君みたいだったから!」

驚く新一を見て慌ててそう言った

灰原「歩美ちゃんの言う通りよ?」

歩美「えっ?」

灰原「彼はかつて江戸川コナンだったわ?」

「姿や年齢は元に戻ってしまったけど中身は何も変わってないもの、だから江戸川コナンと接するような感覚でいいんじゃないかしら?」

光彦「そ:そうですね!」

落ち込む様子の歩美を元気づける

灰原「そうよね? 工藤君?」

新一「あ、ああ!」

蘭「そうよ、歩美ちゃん!」

「新一はコナン君でコナン君は新一!」

「何も気にしなくていいのよ?」

歩美「蘭お姉さん!」

その様子を横目で見る灰原:

理不尽な理屈

灰原（私が今言った意味ちゃんと分かっているのかしら…？）

（江戸川コナンと工藤新一では確かに見た目は違うわ…）

（彼以外の人間が同じ状況に陥った場合、大抵の人間が元の姿と仮の姿とでは同じ性格や喋り方のまま…）

（けど、工藤君…あなたは違ったわ）

（江戸川コナンという仮の姿であなたと出会い関わってきた）

（工藤新一という人間を知らなかった私は元の姿に戻ったあなたにかなり驚かされたわ？だってあまりにも江戸川コナンとは違う人間なんだから…）

（でも、今のあなたは歩美ちゃんが間違えるくらい江戸川コナンに似て来ている…）

（それがどうゆうことか分かるかしら…？）

（それではダメよ…？工藤君…）

新一「屋田誠人がまだ何処へ向かっているのかも分からない状況だ…」

「そんな中ノコノコについて行ってもし何かに巻き込まれでもしてみろ？」

「奴は俺になりきり四件もの殺人を軽々と起こし平気な顔をしている…しかも現場には奴の痕跡はなく現行犯でないと捕まえられない程だ…」

「考えたことはないが、もし俺が殺人を起こすとしたらきつと屋田誠人と同じような手口だろう…」

和葉「ってことは工藤君、蘭ちゃん殺すゆうことか！？そんなん許

さへんで!!」

服部「アホうゝそこやないで？」

呆れた顔で和葉に突っ込む

巧者の作戦

新一「じゃなくて、痕跡も残さないで殺人を四件も起こすということ…」

「痕跡も何も残さず殺人を起こすというのはそんな簡単にできることじゃないし、いずれ何かしらバレてしまう…」

服部「そやな？」

新一「なのに屋田誠人は完璧にやってみせた」

「まるで工藤新一が殺人を起こしたかのように…」

「そこまで完璧に俺を勉強してる人間だ…」

「何もなしで容易く近づく事は危険だ」

蘭「なるほど！屋田誠人の家に行けば何かしら…」

新一「ああ、そうだ、何かしらの手掛かりがあるはずだ」

「目暮警部には昨日、内密に調査してほしいと言っておいたからまだ屋田誠人にはこの犯行が工藤新一によるもの、また工藤新一に偽った人間の犯行によるものという情報は入ってないはずだからな？」

灰原「だから屋田誠人は工藤新一本人が自分を調べに来ることは想定していない訳ね？それを解いて屋田誠人を捕獲する作戦を練るのね？」

新一「そうゆうことだ！！」

そう自信満々な笑みで言ってみせた

これが工藤新一最後の事件になるとは思ってもせずに…

巧者の作戦（後書き）

そして一同は東奥穂村の
屋田誠人宅に着いた

以前と変わらずそこは
不気味な小屋だった

一つ変わっていることと言えば
室内の雰囲気だった

以前のように恨みが
充満しているのではなく

何処か希望で充満する匂いがした

恐怖の丸印（前書き）

灰原「ねえ？これ何かしら？」

新一「何かの科学製品みてえだな？」

灰原「そんなこと分かってるわよ、私は科学者よ？何に使ったのかって聞いているの」

新一「ああ？んな事知るかよ」

灰原「あなた名探偵でしょ？」

新一「いくら探偵でも分からねえ事くらいあんだよ」
ムスっとした様子で応える新一：

灰原（…まさかね？）

恐怖の丸印

蘭「なんだろうこれ…?」

机の上に置いてある地図には赤い丸印が五つ書いてあった

新一「ちょっと見せて?」

地図を蘭から受け取る

新一「神奈川県に茨城県…どうやら殺人現場に印がついてあるみてえだな…」

「群馬に東京… ん?」

灰原「もう一つ丸があるわね…?」

下から透けている地図の裏面を見てそう言った

新一「東京に丸が二つ…!?!」

目暮警部から聞いていた連続殺人は四件だ

現場は神奈川県と茨城県、群馬県に東京都だった

新一は地図を更に覗き込む

新一「……」

地図を見て黙り込む新一の顔は真っ青になった

服部「工藤…?」

博士「何か分かったのかね?」

灰原「……」

新一「…一つだけまだ連続殺人事件が起きていない場所に丸がついてる…」

服部「なんやて…!?!?」

「まだ人殺す気いか!?!」

「ほんなら次はそこか!?!」

新一「…その可能性は高い…」

元太「じゃあ、早く行って止めねえと!?!?!」

蘭「新一、どこなの？それ…？」

…

新一「…東京都…」

「…米花町…」

服部（まさか…！？）

蘭（…！？）

灰原

新一「毛利探偵事務所…！！」

胸から込み上げる怒りを押さえることができず新一は最後の一言に
力が入った

本当の標的(ターゲット)

光彦「まさか…蘭さん…!?!」
皆の顔も青くなっていた

蘭「新一…?」

新一「…くそっ!」

ダンッ!!!

悔しみ机を叩く

灰原「工藤君、あなたって可能性もあるわね?」

博士「なんだって!? でも…丸印は毛利探偵事務所なんじゃろ…?」

新一「いや、恐らく俺が狙いだ」

灰原(…!?!?)

蘭「えっ!?!」

新一「これは俺への恨みの犯行だ、最後に本当のターゲットを狙わないわけないからな」

服部「工藤…?」

和葉「どうゆうことなん!?!」

自分を後に回してまで他人を助ける新一

彼がそうゆう人物だということを服部と灰原は良く知っている

今日の前にいる新一の顔は今までにないくらい怒りに満ちている

大袈裟に言えば今まで自分に迫る危険などどうでもいいと思ってた彼…

過去に同じような状況に陥った時に果たしてこんな表情を見せた事があっただろうか：

だが次の一言に二人は納得した

新一「その可能性がないとはい切り切れないがあくまでも蘭は俺への嫌がらせとしての材料として使われた…」

「本当の標的は俺なわけで…」

服部「おい工藤！？まさか…！？」

新一「ああ、毛利探偵事務所に丸がついているということは奴は何かしらで俺が江戸川コナンだったことを知っているということになる…」

灰原（…！？）

新一の左側にあるロッカーに並べてあるものを睨む灰原

愛する者の絆

新一「つまり…俺のせいで蘭が危険な目にさらされちゃうかもしれないえって事だよ…」

灰原「…」

服部「…」

歩美「そんな悪い奴、歩美達が倒してやる！！」

元太「おう！新一を守れんのは俺達だもんな？」

光彦「ええ、そうです！では早速拳銃持ち出しの許可を頂きましょう！！」

すると一同は毛利探偵事務所へと向かった

その間新一は今日小五郎は出かけると言っていたがもしかしたら探偵事務所にいるかもしれないと蘭から聞き探偵事務所に電話を入れたが留守のようで電話は取られなかった

探偵団の三人は拳銃持ち出しの許可をと歩美の父親に頼んだが日本の、それも人がたくさん通る場所と時間帯からいくらCIAの一員といっても三人を諜報員に迎えたことは日本警察も親ですら知らないこと…いや、知られてはいけないこと
そのため許可を得ることはできなかった

光彦「僕達は僕達で頑張らしよう！」

歩美「拳銃なんかなくても少年探偵団の絆があれば誰だって助けら

れるよね？」

元太「そうだぜ！新一安心しろよな？」

歩美「蘭お姉さんも大丈夫だよ？」

そんな三人の言葉に新一と蘭は微笑む

最早ここまで来ると灰原も三人に忠告をすることが出来なかった…
いや、今の三人には忠告など必要ないといった表情をしていた

降り立つ悪人

その頃

米花駅前のバス亭には屋田誠人が乗車するバスが止まり屋田はバスから降りた

そのバスに乗ろうとした一組の若いカップルが屋田とすれ違う

カップル女性「ねえ、工藤新一じゃない!？」

カップル男性「おお、本当だ!」

この近辺に屋田誠人が現れればこうなるのは当たり前だ

屋田「どうも、こんにちわ!」

だが屋田は最早工藤新一に成りきっていた

屋田（工藤新一…フツバカめ…）

怪しげな顔をしながら屋田は米花町三丁目へと足を踏み入れた

「毛利探偵事務所」

小五郎「蘭ちゅわくんただいま」

こんな真っ昼間からどこで飲んできたのか分からないがかなり酔っ払っている小五郎が帰宅した

小五郎「なんだー? 蘭ちゅわんいないのかー?」

すると小五郎は探偵事務所の電話機から誰かに電話をかけ始めた

ピッポッパッ プルルップルルッ

電話を取る相手は何処かで聞いたことのあるような声だった

『はい！目暮！！』

小五郎「警部！ただいま帰りました！！」

目暮「その声は毛利君かね？」

小五郎「はい私、眠りの小五郎でございます！！」

目暮「なんだね…？酔っ払ってるのか…？」

小五郎「警部！！蘭ちゅわんがないんですく！！」

と悲しそうな声で言う

目暮「なに！？蘭君がいないだと！？」

このタイミングから勿論驚く目暮

迷惑な迷探偵

小五郎「はい…新一の奴とどっかに出掛けたいでいいんです
うえーん！」

目暮「……………」

その言葉に呆れる目暮

目暮「毛利君…切るぞ…？」

小五郎が酔っ払っていることと蘭がただたんに遊びに出掛けている
こと、その付き人が新一だと言うことを聞いた目暮は受話器を睨み
ながらそう言った

目暮（全く…、こんなだから英理さんに逃げられるんじゃ…）

ガチャツ… ツーツーツツ…

小五郎「ん！？ちよっと！？警部殿！？」

新一達はようやく奥穂市を抜けた
すると新一の携帯が鳴った

着信画面には目暮警部と出ていた

新一「はい、工藤です！」

目暮「ああ新一君かね？実はな…」今さっき小五郎から酔っ払った
電話があり大丈夫だとは思ったが今はこうゆう状況下から少し心配

になり蘭が無事かどうかの確認の電話をしてきたみたいだ

おっちゃん・・・
新一

流石の新一も呆れていた

新一「大丈夫です、心配いりません！博士達もいますので」

目暮「そうか、ならよかった！すまんな…」

新一「いえ、わざわざありがとうございました」

電話が終わり後部座席に座る蘭が新一に訪ねた

蘭「今の電話もしかして目暮警部？」

新一「ああ」

蘭「もしかして…探偵事務所で何かあったの！？」

心配になる

新一「ああ…」

新一は半目で苦笑いしながら今の電話の内容を話した

最悪の事態

服部「なんやねん！心配させおって…」

和葉「蘭ちゃんのおっちゃんらしいな？」

蘭も安心したのか笑っていた

だが新一がふと気付いた

新一「ん？待てよ…」

博士「どうしたんじゃ？」

新一（！？）

「やべえぞ…！？」

突如顔色の変わる新一は再び携帯を取り出した

光彦「どうしたんですか？いきなり…」

蘭「新一…？」

新一「おっちゃんから電話が来てすぐ俺にかけ直してくれた目暮警部はおっちゃんは蘭がいねえって言ってたって言った…」

「少なくとも今日蘭が出掛けてから探偵事務所に足を踏み入れてる…」

「いや…この様子だと多分おっちゃんは今探偵事務所にいる…」

灰原「もし屋田誠人の目的地が本当に毛利探偵事務所なら出くわしてしまうわね…」

蘭「そっ…そんな…！」

新一「おっちゃんに危害が加わる確率はゼロに近いが…もし、屋田誠人の妙な行動に気を止めおっちゃんが近寄りでもしたら…」

「っ…くそっ！電話が繋がらねえ…！」

新一はこの事を小五郎に話そうと探偵事務所に電話をかけていたがなぜか話し中になっており繋がらなかった

灰原「携帯は？」

蘭「お父さん昨日お母さんと喧嘩して携帯壁に投げたら壊れちゃったみたい……」

その事を数時間前に聞いていた新一の頭には最悪の事態が浮かんでいた

最悪の事態（後書き）

新一（くそっ…!!）

（おっちゃん……）

博士はビートルを飛ばし始めた

その後を服部と和葉もついて行く

神出鬼没な噂の彼（前書き）

：

快斗「おめえなんか最近悩みがあんだろ？」

新一「あん？別になんもねえよ？」

快斗「泥棒は人の心が読めるんです、誤魔化しても無駄ですよ？」

新一「だから別になんもねえつつうの：」「だいたいおめえ今はもう違えだろ？」

快斗（こいつ自分で気付いてねえな：）

「まあしょうがねえ！来週の日曜おめえんとこ行ってやっから愚痴でもなんでも良いから話せよ？聞いてやるぜ？」

新一 だーからー……

「まあいいや！日曜なんも予定ねえし暇だから待っててやるよ」

「それより前日の土曜おめえ来てくれんだろ？」

快斗「ああ、最高の結婚式にしてやるぜ？」

新一「ありがとな！じゃあまた：」

：

五日前に電話でそう話す快斗と新一がいた

神出鬼没な噂の彼

フッフッ…
屋田

（今に見てろよ？工藤新一…）

米花町内を歩く屋田の目の先には手の中に包まれた小さな袋があった

路地裏に入った屋田はその袋を開け中から一つの小瓶を取り出した

小瓶の中には奇妙な紫色の液体が入っていた

屋田「工藤新一…死す…」

そう呟くと不気味な笑みで路地裏を抜けた

その屋田の目の前には…

屋田「毛利探偵事務所…フッフ？」

探偵事務所内は妙に物静かだった

小五郎「ぐがあゝぐがあゝ」

一つの鳴き声を除いては

案の定小五郎は警部と電話をしたあと直ぐに眠りについた
なんせ眠りの小五郎だ

酔っ払っていたために切った筈の電話の受話器は少しずつれていた

コツコツコツ…

事務所の外から歩く音がした
コツッ

玄関の前でその音は止まった

ガチャッ：

玄関のドアが開く

小五郎「ぐがあゝぐがあゝ」
相変わらず起きる気配はなかった

バタンッ：

玄関の扉が完全に閉まる

探偵事務所内に人が一人増えた

コツコツ：コツコツ：ッ

その人物は歩きながら辺りを見回す

「あんだよくいねえのか？」

探偵事務所を尋ねそこにいた人物とは

工藤新一：いや、屋田誠人：でもない

「ったくよ！自宅にもいないし発明家のじいさんの家にもいないし
よおどこ行っちまってんだ名探偵？」

そう、黒羽快斗だった

もう一人の訪問者

快斗「まさか忘れてんじゃねえよなあ？」

快斗はソファーに座りとりあえず小五郎が起きるのを待った
携帯を取り出し新一に連絡してみるがさきほどと変わらず留守電に
なってしまった

快斗「まあいいか！その内帰ってくんだろ？なんてったってここは
愛する嫁の自宅、一日一回はここに足を踏み入れてることくらいこ
の黒羽快斗にはお見通しよお！」

蘭が嫁に行くことは嬉しいことだが一人娘とあって寂しくも感じる
小五郎と英理は結婚式が終わってから毛利家を出ていくという条件
をつけていた

新一と快斗が親戚だということを知ってから妙に仲良くなった二人、
快斗は新一の諸事情を全て本人から聞いていた

その時：

探偵事務所の外から階段を上がる足音が聞こえた

快斗（お？やっと現れたか？）

快斗は新一だったら脅かしてやろうと思い一旦トイレに隠れた

快斗（クククツ、俺との約束をほったらかした罰だぜ？名探偵の間
抜け面しっかり拝ませてもらうぜ？）

悪戯気な笑みを漏らしトイレの扉をギリギリまで閉めた

コツコツツ…

探偵事務所の扉が開き
誰かが入ってきた

不審な名探偵

快斗はこっそりと外の様子を覗く

快斗（おっ！ビンゴ）

探偵事務所に入ってきたのは新一にそっくりな屋田誠人だ
その顔は整形しているのだから自然と瓜二つな快斗よりも新一に似ている

遠目から見た快斗が間違えるのは当然だ

屋田誠人は辺りを見回す

小五郎の方へ歩み寄り寝ている小五郎の体を揺らす
だが当然小五郎は起きない

快斗は偽新一が目の前に来たときに突如飛び出して驚かそうと思っていたが何処か不審な偽新一の様子を見てそれを躊躇していた

快斗（あいつ何してんだ？）

その時ふと嫌な予感が胸をざわつかせた

昨日皆と共に目暮警部から聞いた妙な事件の事だった

すると屋田は小五郎から少し離れた所に止まる

何かを考えている様子で快斗の位置からもその姿は確認できた

屋田は数分その場に立ち尽くした後何かを決めたようにカバンを開ける

そのカバンから出されたものを見て快斗は確信した

快斗（あいつ寝ぼけてんか？）

（ん…？　！？）

（拳銃…！？）

屋田は拳銃を数メートル離れた小五郎に向けていた
快斗（あれは…工藤新一じゃねえ…）

すると快斗はトイレの扉を完全に開けた

怪盗と殺人鬼

屋田は開いたトイレの扉に反応しそちらを見た

屋田「工藤：新一」

留守と思っていたので正直驚いていた
だがすぐに不適な笑みでこう言った

屋田「丁度いい…」

快斗（こいつ俺が名探偵だと勘違いしてやがる：俺も都合がいいぜ）
快斗は一瞬の隙を見てできる限りで更に容姿を新一に似せた

そして今までに二回しか話したことのない屋田もまた目の前にいる
人物が工藤新一ではないということに気づかなかった

快斗「なんの用だ？」

屋田「お前に復讐しに来た」

単刀直入に言う屋田は拳銃を小五郎に構えるのをやめ快斗の方に歩
み寄った

快斗「俺に恨みがあんなら直接俺んどこに来い」

「おっちゃんに手出すんじゃないやねえよ」

（ってあいつなら言うよな：？）

屋田「お前を恨んでるんだ！お前を苦しめるようなことをしなくて
復讐が務まるとでも？フッフツ…」

「まずはこの迷探偵から、次は…」

屋田は机の上に飾ってある蘭の写真を見て奇妙な笑みを浮かべる

快斗「…」

（おい名探偵…、状況はかなりやべえぞ…？こいつ、異常だぜ…）

怪盗と殺人鬼と探偵

「米花町三丁目」

新一（もう少し…早く！早くっ！！）

蘭（お父さん…っ）

新一と蘭を始め皆が小五郎の無事を願っていた

博士「あと少しだっ！」

交差点を右に曲がった瞬間聞こえた

バアーンッ……………

新一（！？）

博士（！？）

米花町に一発の銃声が鳴り響いた

灰原「今の音…まさか探偵事務所…？」

新一「くそっ…！！」

一同が今の音は探偵事務所で発砲された銃声の音だと確信した

博士は探偵事務所の前に着くとビートルを急ブレーキで停めた

新一はビートルが停まるか停まらないかの時にドアを開けて外に飛び出し探偵事務所内へと走って向かった

その後を光彦、歩美、元太、蘭、灰原、博士の順で追う

すぐに服部と和葉の乗るバイクも到着し二人も銃声が聞こえたのか慌てて降りた

新一は階段を一気にかけ上がり勢い良く探偵事務所のドアを開けた

バンツ！　パシユツ……

新一がドアを開けたと同時に目の前を得体の知らない液体が飛び散った

その液体の飛び散る行く先を見るとそこには……

新一「か……快斗……!!？」

先程の銃声は快斗が撃たれた銃声だったようだ

名探偵、最後の事件・追憶・

小五郎「んにゃ…？」

このタイミングでやっと起きた小五郎は目の前の光景を理解できずにいた

小五郎「ん？探偵坊主と…探偵坊主に…探偵坊主…！？」

屋田も本物の工藤新一登場に驚いていた

新一「おい、快斗しっかりしろよ！」

快斗は腕に弾を埋め込まれていた

その傷口からは紫色の液体が流れ出していた

灰原「毒薬だわ…！」

新一（…！？）

新一は思わず快斗に塗られた毒薬を口で吸い上げ吐き出す

服部「工藤…！？」

和葉「あかんよ…！！救急車呼んだ方がええ…！！」

新一「毒薬を浴びせられれば体内に吸収させられる前に取り出さなきゃなんねえんだ…！！その時は一刻を争う…！！一秒でも一瞬でも早く除去しなきゃなんねえ…！！救急車呼んでる暇があるならまず応急措置だ…！！侵されてからじゃどうにもなんねえんだよ…！！！」
そう言いながら新一は快斗の腕に塗られた毒薬を吸い吐き続ける

この中で今の発言にもの凄く胸を突かれた者がいた

灰原（工藤くん…、解ってはいただけどあなた、私が思う以上に苦しめられていたのね…）

（それなのにバカね私…）

（私もこうなる前に組織という毒薬から私という液体を吸い上げて
欲しかったわ…）

名探偵、最後の事件・罪悪感・

その様子を蘭も心配そうに見ていた…というかこの状況に固まっていた

その蘭の様子にふと気付いた新一は思わず手が止まってしまった
新一（蘭…、わりいな…）

「ゴホッゴホッ…」

むせる新一

新一（…！？）

快斗「名探偵…」

苦しみながら何かを伝えようとする

新一「喋んな！気にすんな…」

「お前はこうなる筈じゃなかった悪いのは全て俺だから…」
何処か悲しそうに言う

快斗「…じゃなくて…」

新一「えっ？」

蘭「新一！！」

小五郎「探偵坊主！！」

服部「工藤！！」

その呼び掛けに驚き快斗も指す視線の先を見ると…

屋田「こっちが本物か？」

と言いながら銃を新一に向けていた

その瞬間…

博士「新一、危ない!!」

蘭「新一!!!」

服部「あかん、よけろー!!」

バーンッ………

：

博士と蘭と服部が新一を守ろうとしたがすでに遅く屋田の持つ銃からは煙が出ていて発砲されてしまった

銃の所持を許可されなかった探偵団の三人も今回は武器なしで凶悪犯に立ち向かおうとしたがやはりいくらCIAに加入したからといって誰かを誰からでも守れる訳ではなかったのだるか？

いや、探偵団の三人にそんなことがある筈がない…

ましてや新一を守り抜くと決めていたのに…

名探偵、最後の事件・危険な時・

新一「うっ…」

思わず目を瞑った新一だが痛みを感じないために目を開けた

新一（！?）

すると自分の上に誰かが覆い被さっていた

新一（…!?）

「灰…原…!?!? 灰原!?!?」

新一を守るために小さい体で精一杯銃弾から庇っていた

灰原「…よかった」

幸い屋田の放った弾は灰原のおかげで新一に当たる事はなかった

灰原もすばやくその場を離れたために傷一つもできてはいなかった

屋田「邪魔するな!!」

灰原に向かい怒鳴る

すると灰原は立ち上がりいつになく冷静な表情で屋田に問い掛ける

灰原「あなた職業は？」

屋田「はあ…? 職業…? 無職に決まってるだろ? お前に復讐するた
めにこの一年間寝る間も惜しんで作戦を考えていたんだから」

新一を睨みながらそう言う

灰原「紫色の液体は一体なにかしら?」

屋田「フンッ、あれは毒薬だ」

服部「毒薬やって!!?」

灰原「大丈夫よ、彼に放たれた毒薬は工藤くんが全て吸い取ってく

れたから」

和葉「ならもう大丈夫なん？」

灰原「ええ、ほら彼の腕からはもう血液しかでていない、液体が全て除去された証拠」

「この様子だと彼は止血しておけばなんとかなるわ」

蘭「よかった！」

灰原「工藤くんの……」

ふいに灰原は新一の方を見た

すると何処か様子がおかしかった

名探偵、最後の事件・毒薬の驚愕・

灰原（えっ…？工藤くん…！？）

（うそ… まさか…本当に…！？）

屋田「何も良くねえよ、その毒薬はある科学者が作った、人を幼児化させる薬なんだよ」

一同は驚きを隠せずに絶句していた
灰原以外は…

屋「工藤新一、お前はここ半年くらい事件の調査で何処かに姿を消してたよな？その頃はよかったぜ？お前は彼女を置いてとんずらか名探偵の座を二人の探偵にとられたとか事件に巻き込まれて死亡とまでもあったからな？俺はとても有意義な時間を過ごせた」

新一「くっ…」

新一は苦しみに耐えていた

屋田「俺は色んな奴に声をかけられて逆ナンもされた…けどある日思ったんだ俺は俺じゃなくて工藤新一として声をかけられてるんだと…」

「そしたら無性に腹がたってきた、そんなある日どこかの組織が破壊したその協力者が工藤新一だと報道されその日からお前はよくこの米花町に姿を現すようになり高校へも毎日顔を出すようになった」
「それが俺には堪らなく憎かった…」

「同じ顔をしているのに、同じ工藤新一なのにどうしてこうも違うんだと…！」

「それで俺は工藤新一をこの世から消し去る方法、いや消してしま

「ったらお前を苦しめる事ができないからこの毒薬を研究し作った」

灰原「APTX4869」

新一（！！）

屋田「ああそうだ、良く知ってるな？」

新一は灰原を見つめていた

名探偵、最後の事件・復讐と復讐・

灰原「ええ、興味のある毒薬だからね？」

「今は組織に興味を持った人間ならAPT4869の存在を誰でも知る事ができるわ？なんせ半世紀も前から進めてきたプロジェクトなもの」

屋田「そうだな？」

屋田は怪しげな笑みを浮かべた

灰原「まあ、混乱を避けるためにある人物がデマだということを世間には伝えたいんだけど、どうやらあなたは本気として捉えたのね？」

屋田「当たり前だろ？マウス実験で鼠が一匹幼児化してるんだぜ？信じない方がどうかしてる」

灰原「そしてこの毒薬で工藤君を幼児化させようとしたのね？」

「本来はカプセル型の毒薬だけれど液体にして傷口、つまり体に吸収させられるような所に塗れば大丈夫と素人のあなたは思ったわけね？」

屋田「ああ、だがとんだ邪魔者が入っちゃったな？」

「…フッフ、まずは生意気なお前からだ…」

そう言う屋田は灰原に向かって拳銃を構えた

新一「灰…原…!!」

蘭「哀ちゃん!!!」

だが灰原は微動だにせず話を続けた

灰原「あなたAPT4869の由来を知っているかしら？」

屋田「あん？あんな毒薬に由来なんてあるのか？」

バカにしたように笑いながら言う

名探偵、最後の事件・暗闇の策略・

灰原「“アポトキシシン”のアポとはアポトーシス：プログラム細胞死の事」

屋田「：？」

灰原「そして4869もじってシャーロック：」

「出来損ないの名探偵：つまり試作段階の毒薬よ」

屋田「試作段階の：毒薬：！？」

灰原「ええ、あなたの部屋にあったあの薬品あればこの液体の毒薬には入れているのかしら？」

「本来、APTX4869の調合法としてあの薬品は使わない：試作段階でないのならともかく試作段階のあの薬にあの薬品を投与すればその毒薬の効き目はゼロになるわ」

屋田「ハッ：そんな筈は：」

「だいたい子供のお前に何が分かるんだ！？何が細胞死だ！！何が出来損ないの名探偵だ！！」

「あの調合書にはそんなことは書いてなかった！！」

灰原「そうでしょうね？組織に非協力的だった私はこうなる事を想定し被害者を最小限に押さえるために必要以上の事は書いていない：それどころかあなたが使った薬品を投与させ被害者をゼロへと導き出すために工夫してあったのよ？あなたはまんまと私の策略に騙されようと思ってもせずにね？」

屋田「お前：何者だ：？」

灰原は一瞬うつ向いたがすぐに屋田を見つめて言った

灰原「私はAPTX4869の開発者、元組織の人間よ：」

新一「バカ：！やめろ：」

名探偵、最後の事件・最後の危険・

ウーウー

ウーウーウー

そして外から凄まじい数のサイレンが聞こえてきた

毛利探偵事務所に警察が入ってきた

警官は三人が同じような顔をしているのに困惑したがすぐに拳銃を持ち固まったままの屋田を無事に逮捕した

屋田「……………」

同時に救急車がきて快斗は搬送された

連行されていく屋田に対し灰原は

灰原「私はあなたを許さない」

と一言吐き捨てた

服部「工藤、大丈夫か？」

蘭と服部と和葉が新一に駆け寄る

光彦「灰原さん、新一さん大丈夫なんですよね？」

元太と歩美と光彦も新一を心配そうに見つめる

それもそのはず、新一の容態は悪化しその表情を見れば具合が悪いのは一目瞭然だ

博士は新一のために救急車を呼ぼうと携帯を出す

灰原「大丈夫よ博士」

博士「えっ？ 新一は…」

灰原「いや大丈夫ではないわね」

その表情に何かを察した服部

服部「まさか…また小さなるとか言わへんよな？」

灰原「……………」

歩美「さっき哀ちゃんこの毒薬の効き目はゼロになったって言ってたよ？」

蘭「哀ちゃん…？」

新一「ぐっ…」

（いや、この感じは…）

灰原は新一の方へ歩み寄り重たい口を開いた

灰原「屋田誠人の思うツボになったらムカツクでしょ？」

開かされた扉

灰原「本当はあれが嘘…」

元太「おい、それじゃあ…」

博士「でも毒薬を塗られたのは快斗君じゃろ？ 新一は吐き捨てていただけで…」

灰原「ええ、吐き捨てているだけなら何の問題もなかったけど…」

「彼は何かのひょううしにその毒薬を飲んでしまったのよ…」

（そう、あの時に…）

灰原は蘭の方を見る

すると蘭は言い現せないほど悲しそうな表情で新一を見つめていた
蘭（新一…うそ…でしょ…？）

博士（だから哀君はさつき屋田に一言ああ吐き捨てたのか…）

服部「工藤…」

新一を見つめる

和葉「病院連れて行かなくても大丈夫なん？」

灰原「病院に搬送された方がそれこそ大混乱だわ…もし病院で幼児化してしまったら彼の父親が世間に公表した事が水の泡だわ」

「それにこの毒薬には本来なら使わない薬品が調合されているわ、あの薬は幼児化を止める事はできないけれど確かに毒性を消すことはできるわ」

「だからこのまま幼児化するのを待っていても何の心配も要らないわ、むしろこのまま見守っていなければならぬ…」

博士「……」

蘭「……」

光彦「また…また元の姿に戻れますよね!？」

灰原「…」

服部「そやな? あんたならまた解毒剤作れるよな?」

服部は自暴自棄な表情で灰原を覗き込む

“蘇”

新一「ぐあーーーーー!!」

すると新一はいきなり叫び声をあげる

新一の体はみるみるうちに縮んで行き

あっという間に江戸川コナンに戻ってしまった

小五郎「た…探偵坊主…!?!」

初めての光景に唾然とする

灰原は完全に江戸川コナンになった新一の体の状態を確認する

灰原「具合は？」

コナン「ああ、なんとかな…」

なんとも言えない二人の表情

蘭「コナン君…」

コナン「蘭…わりいな…」

蘭「……………」

灰原「……………」

服部「工藤がまたコナンになっちまったんや、これからどないするか考えんで？」

博士「そうじゃのお…」

「しかし今回は黒ずくめの男達の仕業じゃないのだから警察に届けてみてはどうかね？」

灰原「高校生が幼児化したなんて誰が信じる？例え信じてくれたとしてもそんな世界がひっくり返ってしまうような事実周りに話したくならないわけないでしょ？そうなれば工藤君はもちろん、私達は

「この世界で生きていく事は不可能になりかねないわ」
和葉「それもそやな…」

と色々考えた結果、また周りには正体を隠して江戸川コナンを演じて行くしかないという結論に辿りついた

蘭「哀ちゃん…新一は…」

「新一は…今度新一はいつ戻って来れるかな？」
その蘭の一言に皆が胸を痛めた

“蘇”（後書き）

もし屋田誠人という人間が
今日ここに来なければ、

あの時心を鬼にしても
事実を伝えていれば、

そしてもう少し早く
式を挙げていれば

もしかしたらこんなことにはならなかっただろう…

また帰ってきてくれるよね？
このままいなくなったりしないよね？

その言葉はこんな想いが詰まっているように感じとられた

その時、彼女は…（前書き）

皆が理解し和解した後…

落ち着いたコナンを
見計らって一同は
その場を後にする

小五郎は

そのまま二度寝へ

蘭も今日は

寝る事にした

服部と和葉は

明日から大学入学の

手続きがあるため

二時間後の便で大阪へ

帰ることとなり

探偵団の三人と

博士と灰原と

コナンは皆で

帰宅路を歩いていた

その時、彼女は…

歩美「なんか懐かしいね!!」

歩美が沈黙を破り場を和ませる

光彦「そ…そうですね! またみんなでキャンプとか行きましょうよ!!」

光彦がそれにのる

元太「で…でもよ、新一は俺等といっても楽しくないんじゃないかねえか?」

その言葉に光彦と歩美は一気に落ちた

考え込んでいたコナンと灰原は我に返る

そしてコナンはそんな三人の様子を見て言った

コナン「バーロツ! 少なくとも俺はお前等とキャンプだの温泉だの旅行に行けて楽しかったぜ?」

光彦「新一さん…」

コナン「まあ、また暫くよろしくな?」

歩美「うん!!!」

光彦「はい!!!」

元太「おう!!!」

そんな言葉に三人は笑顔を取り戻した

灰原はコナンに向かってコソコソっと言う

灰原「そんな呑気な事ゆっていいのかしら?」

コナン「こうでも言わなきゃってらんねえだろ？」

「毒薬を飲んぢまってまた江戸川コナンの姿になって既にA P T X 4869に関わる資料は全て処分されて俺が工藤新一に戻れそうなあては何もないんだからよ」

そう、灰原は解毒剤が完成しコナンを新一に戻した後、この世にあってはならないA P T X 4869の調合書や資料は全て処分していた

その思いを凶星にされた灰原は

灰原「ごめんね…工藤君…」

目に涙を浮かべてそう言った

あまりにも似合わない表情をする灰原に

コナン「なに泣いてんだよ？おめえらしくねえぞ？」

灰原「……」

コナン「気にすんなよ！俺はまあ、江戸川コナンとして楽しくやっていくからよ！！」

笑顔で言う

彼女の決意

灰原「警察が屋田誠人のあの小屋を搜索するのはいつになるかしら？」

コナン「あん？ ああ、遅くても明日にはやるんじゃないか？」

灰原「そう…」

真剣な眼差しで何かを考えている

コナン「おい、まさかおめえ…」

灰原はコナンの顔をチラッと見る

コナン「やめとけよ？ あいつはきつとネットか何かで調べて作ったんだろうぜ？ あの小屋には調合法の書籍や解毒剤の解明書なんてないと思うぜ？」

灰原「……………」

（そうね、私もそう思うわ…）

（だけどね私にはこのままっていうのはどうしても許せないの…）

（ないかもしれないけどあるかもしれない、そんな状況の中で私は大人しくしてるなんてできないわ…）

（工藤君…私はもう一度、もう一度あなたのために頑張ってみるわ…）

コナンの思いとは裏腹に灰原は新一を助けるべく決心した

そんな二人の様子を楽しく喋るようにして伺っていた光彦と歩美と元太がいた

疲れてしまった蘭は早々と風呂に入り寝床についた

眠いが眠れない…

風呂に入ったはずなのに疲れがいまいちとれていない…

瞬きもせず目を開けたまま何かを考えている、何かと言ってもそれはただ一つ…

それぞれ…

蘭「新一…」

(どうして? どうしてなのよ?)

(いつもこんなのはっかり…)

(ううん、本当は嬉しい事もたくさんあったはず…もしかしたら幸せの時の方が多かったかもしれない…)

(もっと…もっと新一の傍に入れば良かった…)

(もっと新一と向き合えばよかった…ね? 新一)

蘭の部屋からは啜り泣く声が聞こえた
隣にいる小五郎もそのせいか眠れなかった

「大阪行・飛行機内」

服部と和葉は飛行し過ぎ去る夜空を無言で眺めていた

和葉(蘭ちゃん大丈夫やろか?)

服部(工藤…これから勝負かもしれない…)

(お願いやからもっと俺に頼れや、なあ? 工藤…?)

和葉「にしても哀ちゃんビックリしたわ」

服部「はん? ああ、工藤庇いよった時のか?」

「何もあらへんかったから良かったけどあら、工藤を守る決めた課報員の三人の出番やさかいに突っ立ってただけとはまだまだやな? まあ、所詮は子供やな?」

「それに、工藤は俺が守ったる!」

和葉「平次、何言っとな？」

服部「なにがや？」

和葉「あの子ら哀ちゃんより先に犯人がやりよる事予想して工藤君とこ走って行こうとしてたで？」

「それをうちが止めたんよ？」

服部「はあ！！？なんやて！！？」

突然機内には怒鳴り声が響き渡った

西の二人の推理

服部「どうゆうことや!? 和葉!」

「みんな無事やったからよかったけどなんでそないなことしたんや!!!? 工藤が殺されてもかまへんかったんか!!!?」

凄まじい剣幕で怒鳴り立てる

和葉「ちよつ平次落ち着き!」

「ちやうよ? うち哀ちゃんの気持ちが分かったからあの子らを止めたんや! 工藤君がどうなってもよかったなんてそんなこと思うわけないやろ!?!」

服部「ちっこい姉ちゃんの気持ち…? なんやねんそれ?」

和葉「まさか平次気付いとらんのか!!!?」

服部「はん…?」

和葉を横目で睨み付けた

和葉「哀ちゃんは今工藤君が好きやねんで?」

服部「はあ? なにアホなこと言ってるねん…」

和葉「アホは平次やで!!!」

「工藤君を見る時あんな愛しい顔してはるの分からへんのか?」

服部「愛しい顔やて…?」

和葉「そうや、きつと工藤君を庇ったんは衝動的にやで? あの子等は犯人が工藤君に拳銃つきつけて引金引くか引かへんかの時にはもう工藤君とこに駆け寄ろうとしてたんやけどその前に哀ちゃんが駆け出しよって…」

「その哀ちゃんの顔見たらここでこの子等が助けるのはあかん思てうちが止めたんや、それにあんな顔しとるとこ見たのは初めてやないしな?」

服部「んー…責任感があるからってことか？」
いまいち分からない様子の服部

和葉「それもあんのかもしれへんけど…でも哀ちゃんが工藤君庇った時はまだ工藤君に毒薬が盛られとることは分かってへんかったし…」

「そないなのとは違うて、なんか宝物扱うような顔するねんで？」
「あれは工藤君を愛してる証やで？うちが保証したる！！」

と自信満々に言いきった

恋人を想う気持ち

服部「なにが保証したるや！」

「お前に乙女心が分かるかっちゅうねん」

和葉「うちは乙女やで！」

（恋する立派な乙女やもん…）

・阿笠邸・ 現在19時30分

探偵団の三人も帰宅しソファで寝っ転がるコナン
博士と灰原はリビングでコーヒーを飲んでいる

時計の針の音だけが部屋に響き渡る

その頃阿笠邸の外では光彦と歩美と元太が晴れない表情で阿笠邸を
見つめていた

光彦「灰原さん…大丈夫でしょうか？」

歩美「コナン君より哀ちゃんの方がなんか元気なかったね」

元太「やっぱり毒薬の開発者だから責任感じてんのか？」

光彦「…」

歩美「…」

元太「…」

光彦「僕は…」

「僕は灰原さんの婚約者として屋田誠人の小屋に行き毒薬に関する
資料があるかどうか探しに行ってきます…」

元太「お前本気かよ!？」

歩美「なかったらどうするの!？」

光彦「ない確率の方が高いですけど…でも、…でも例え1パーセントでも可能性があるなら僕は灰原さんを愛する者としてその確率に掛けます!！」

元太「光彦…お前…かっこいいな…?」

光彦「いえ、当然です!」

「元太君と歩美ちゃんは危険ですので待っていてくだ…」

歩美「やだよ!！」

元太「そんな聞かねえぜ!！」

光彦「!」

友達を想う気持ち

元太「お前は俺の友達だぜ？だいたい諜報員に加わったわけだし友達が困ってんのに見捨てられるかよ？」

光彦「いいえ、これは僕と灰原さんの…」

歩美「哀ちゃんだってそうだよ？」

光彦「えっ？」

歩美「哀ちゃんは私達の友達！友達が困っていて助けるのは当たり前でしょ？それにもかしたらコナン君はまた新一お兄さんに戻るかもしれない！新一お兄さんを守るって決めたもん！！」

元太「そうだぜ？お前一人だけでかっこつけようとしてんじゃないやねえよ！」

光彦「元太君：歩美ちゃん：」

光彦は本当に嬉しそうな顔をしている

不安から安心へと一気に花が咲いたようだ

元太「そうと決まれば二時間後に光彦ん家な？」

光彦「わかりました！」

歩美「わかった！」

そう言う三人は別れた

阿笠邸の地下室兼自身の部屋の椅子に灰原は一点を見つめて座っている

灰原（工藤君、ごめんなさい…）

（でも…、本当のところ私はあなたにこのまま江戸川コナンでいてほしいわ）

（江戸川コナンでいるからって叶うわけではないしあなたの気も変わらないと思うけど…）

（でも…それでもなんか近いような気がするから…）

（本当は自分の為には行きたくないけど…、だけでもうあなたをこれ以上苦しめるのは私も許さないから…）

（工藤君、待っててね…）

友達を想う気持ち（後書き）

そして灰原は地下室のドアを開けた…

ボストンバッグにたくさんの荷物を詰めて…

コナンと博士は熟睡しておりそんな灰原には全く気付いていなかった

同時にまた悪夢への導きが始まろうとしていた

夢の中のまた幻想（前書き）

元太、光彦、歩美はまた怒られると思い歩美の父親、吉田には何も言わずに家を出た

もちろん他の親達にも…

そしてその頃灰原は一人奥穂村行きのバスに乗車していた

夢の中のまた幻想

ブルンツブロロロ…

バスが発車した

灰原と同じバスに乗っているのは灰原を除いて二名
その中の一人、長身で帽子を深く被る男に灰原は微かに嫌な匂いを
感じていた

しかし…

灰原（まさかね…組織は全て破滅したはず、気のせいね…）
（嫌な匂いね、まだ感じるなんて…）
と窓の外を眺めて思う

男「……」

「阿笠邸」

ぐっすり眠るコナン…

だがコナンは嫌な夢を見ていた

↓

どこかの森の中を必死に走るコナン

コナン「ハアハア…」

「ちきしょうっ！」

誰かを捜しているようだ

「新一…」

コナン（！？）

ふと誰かに呼ばれ立ち止まるコナン

コナン「…蘭か！？」

辺りを見回す

「新一…！」

「新一！」

だんだん声が近くなる

「新一！」

するといきなり白い光に目の前を包まれる

コナン「うわっ！なんだ！？眩しい…」

すると光の中に影が現れた

コナン（…！？）

（蘭…！？じゃねえな…）

その影はコナンと同じくらいの背丈だった

だんだん人影が近づき顔が見えてくる

「新一…！」

コナン「…！？」

そこにいたのは灰原だった

|

偽りの真実

コナン「はっ!!」

思わず飛び起きる

コナン「ハァハァ…」

夢を見てこんなに息切れしたのは初めてだった

コナンは辺りを見回すがそこは特に変わらず普通にソファアの上に
コナンが居て眠りについた時と変わらず博士の家だった

コナン（フツ…）

するとコナンは再び横になった

コナン（灰原が新一って呼ぶなんて、ありえねえ夢だな…）

（“新一君”ならともかく呼び捨てだなんて、蘭しかいねえもんな
…）

（あいつの夢…そういや見るの初めてだな）

目が覚めてしまったコナンは今の夢に少々疑問を抱き灰原が寝てる
と思われる寝室に行ってみた

ドアを開けたコナンの目に映ったのは

博士「ぐがあゝぐがあゝ」

コナン（ハッ、相変わらず鼾うるせえなあゝ）

（なんだ…寝てるじゃねえか…）

博士の隣のベッドを見てそう言った

ドアを閉めたコナンはまたソファ―に寝っ転がる
コナン（思い過ぎだったな…）

するとコナンは再び眠りについた

そう、こんな事も想定していた灰原は自分の布団の中に毛布を詰め
込み布団に膨らみを出していた

まるでそこで寝ているかのように…

夜中の渦中

光彦「これですね！」

目の前に停まるバスを見て指を指す

元太「奥穂村行きて書いてあるな！」

歩美「じゃあこのバスで屋田誠人さんのお家に行けるのね！」

光彦「ええ、バス亭から少し歩きますけどこれに乗れば1時間くらいで着きます」

そして三人はそのバスに乗車し東奥穂村へと向かった

灰原は東奥穂村のバス亭に着き森の中を歩いて屋田の小屋へと向かっていた

「阿笠邸」

現在、午前4時50分

あれから約二時間後、コナンは再び目を覚ました

コナン「ふあー、まだ5時前か…」

ジャー… ガチャツ

トイレの扉が開く

コナン「博士」

博士「おう新一、起こしてしまったかの？」

コナン「いや、丁度目が覚めた」

博士「そうか、なんかわしも今日は早く目が覚めてしまった」

博士はコナンが座るソファの対面のソファに腰をおろした

コナン「灰原のやつ寝てんのか？」

博士「ああ、鼾一つかかずに寝ておるわい」

コナン「そうか…」

そう言いながら下を向くコナンに疑問を抱く博士

博士「どうかしたかの？」

コナン「ああ、変な夢見たんだ」

博士「夢？はて、どんな夢だったんじゃ？」

コナン「それが、俺が森の中を走ってたらいきなり“新一”って呼ぶ声がしてその声の方を向いたら灰原が立ってて…」

博士「哀くんが新一と言うのは何処か不自然じゃのお」

笑いながら新一にそう言った

紫色の報酬

コナン「ああ、だから灰原の寝室を覗いたんだ」

博士「ん？というと…」

コナン「何か嫌な予感がしたから…、でも別に何もなくて眠っていたけどな？」

博士「そういや、今日の哀くんは起きないな」

コナン「えっ？」

博士「最近よく何かの夢にうなされていたんじゃが今日は静かに眠っておったな」

コナン「夢って？」

博士「いや、分からんのじゃが新一の名前も口にする事もあつてな…」

「まあ、最近新一と蘭君の結婚式に備えて可愛いドレスを着るんだってダイエットしていたからストレスもあるんじゃないけど…」

コナン「可愛いドレス？ああ！あれか…らしくねえな？」

灰原が結婚式の日ピンクと白のドレスを着ていたのを思い出し呆れた顔でそう言うコナン

博士「新一のためじゃろ？」

コナン「俺のため？」

博士「おっと…！」

「これ以上言ったら怒られるので…ホホホ」

「まあ、人のメタボを気にする前に自分の体調管理をしっかりして欲しいものじゃの」

コナン（俺のためにダイエット…？）

（自分の事より人の事…）

（……………）

再び襲い来る悲劇

するとまた灰原に呼ばれているような気がした

『新一…!』

コナン（!?!）

何かに気付いたような様子で灰原の寝室に駆け寄る

コナン（あいつ、まさか…）

そしてドアを開けて布団をめくる

コナン（!?!）

そこに灰原はいなかった

コナン「ちきしょっ!博士!!車出してくれ!!!!」

「屋田誠人の小屋」

灰原「やっぱりないわね…」

まだ搜索されてない事はよかったが毒薬に関する資料が何もなく気を落とす灰原

灰原「はあー…」

気力のないため息をつくとその場に座り込んだ
もうだめね…
灰原

（何もかも失ったような気分だわ…）

（工藤君…ごめんなさい…）

すると小屋の外で音がした

ガサッ

灰原（！？）

ギーッ…

小屋のドアが開くとそこには小太りな中年男性が立っていた

灰原「誰…？」

その男性は灰原を見つめながらこっちに近づいてくる

灰原（…！？）

そして男性は灰原の所まで来ると座り込んだ
迫ってくる男性に怖くて思わず目を瞑る灰原

灰原（工藤君…、助けて…）

男性「おやおや、ダメじゃないか？」

灰原

その言葉に目を開ける

危険な遭遇

男性「夜遅くにこんな所にいたら補導されてしまうよ?」

「子供の姿なんだから…?」

灰原「:!?!」

今灰原は九死に一生の状態だ

“灰原哀”が幼児化している者だと知っているのは身近な人間と一部の組織の人間だからだ

男性「補導されたら大変だろ? 戸籍がないんだから…ねっ? 志保ちゃん?」

灰原「……」

「あなた組織の人間かしら?」

男性「ハハハ…組織の人間?」

「そんなバカげた事はしないよ」

灰原「えっ…?」

男性「私はただあの忌々しい毒薬を手に入れに来ただけだ」

灰原「:どうゆうこと?」

男性「私は君の父親、宮野厚司の友人さ」

灰原「お父さんの…!?!」

父親の友人だと聞いて少し安心する

男性「ああそうさ、子供の頃は良く一緒に遊んだりしてとても仲が良かったんだ」

灰原「……」

男性はこれまで優しい顔で淡々と話していたが急に顔の表情が一変

し最後にこう言った

男性「あの日まではね……!!!!」

灰原「……!?!」

再び不信感を抱いた灰原は拳を作りギュツと握った
その掌の中は汗ばんでいる

真相と復讐

男性「私の娘は組織の人間にあの毒薬を飲まされて死んだ」

灰原「!?!」

男性「その毒薬を作っていた厚司を恨んだ…」

「組織に入ると知った時に止めたが聞く耳を持たなかった…まあ、それもそうだな厚司にも家庭があったんだから」

「でもだからといって仕方ないでは済まなかった…、特に娘の死の真相を突き止めた時には…」

灰原「だからこの世から毒薬を消し去ろうとしてここまで来たのね？」

男性「ああ、テレビで報道された屋田誠人に疑問を抱き調べたらそいつが毒薬を作るための薬品をネットで購入していたことが分かった」

「あの薬品で復讐のために作る薬と言ったらまず一つ、組織の存在を知った者が作りたくなる毒薬、“APTX4869”」

灰原「……」

男性「その屋田誠人がテレビに映った時に復讐、復讐と騒ぎ立てていてふと思ったんだ」

「もしかしたらここにまだあるのかもしれないと」

灰原「よかったわね、ここにはないわよ」

男性「その様だね、窓の外から中を覗いていたから…」

灰原「…っ」

男性「でもその代わりに厄介な者がいた」

「そう、宮野厚司の娘で毒薬の開発者である灰原哀こと…宮野志保がね!..!」

そう言いながら男性は灰原に拳銃を突き付けた

緊急事態・コナン編・

コナン「博士！急いで！！」

コナンと博士はビートルに乗って東奥穂村の例の小屋に向かっていた
昼間、灰原の言った言葉：

まさかとは思ったがそれ以外に思い付かなかった

しかも何も言わずに出て行ったこと、探偵団バッヂを置いて行った
ことからその推理は容易に立てられた

博士「急いではいるが、でも新一なぜそんなに急ぐのじゃ？」

「確かに哀君は心配じゃが屋田誠人は捕まったんじゃないぞ？あの小屋
には誰も居らんだろうに！」

コナン「バーロ！！居ねえから急いでんだよ！」

「あの毒薬で命を落とした被害者は大勢いるんだ」

「夜のニュース見ただろ？あんなに屋田誠人が報道されて“組織”

だの“毒薬”だの“復讐”だの言ってるや、不審に思ったその遺族
達がもしかしたら屋田誠人の小屋を探して来ちまうだろうぜ？」

博士「なぜそんな…？」

コナン「分かんねえのかよ？大事な家族や友人がああ毒薬で殺され
てんだ、その毒薬を恨まねえわけねえだろ？」

「破滅にしろ複製にしろ小屋に訪れる可能性はかなり高い！」

博士「そんな…！」

コナン「毒薬に興味を持って複製しようとしているならまだしも破
滅しようとしてるなら灰原はかなり危険な状態になることもある…」

博士は一気にスピードを上げた

緊急事態・灰原編・

コナン（そう、毒薬のことを知っているやつなら最低でも組織のこともある程度は調査済みだ…）

（そこに毒薬の開発者の宮野志保のことももしかしたら載っていたかもしれない…）

（灰原が宮野志保だと気付かないならいいがもし気付いちまった時には…）

「つくそ…！！！」

あれからも男性は灰原に拳銃を突き付けていた

男性「当然お前がいなければあの毒薬は打ち切りになったか試作段階で使用されることはなかった、お前がいなければな！！」

灰原「私を復讐のために殺すの？」

男性「ああ、娘の仇だ」

灰原「それで娘さんは満足するのかしら…？」

男性「なに？フツ…今更説得させようとしても無駄…」

灰原「私なら物足りないわ」

男性の発言を遮るように何かを胸に秘めている灰原が力強い眼差しと共に突っ込んだ

男性「は？なにを言ってるんだ？」

灰原「…私なら憎む相手を最高に苦しめるわ」

「例えば復讐したい相手の身の回りの人間を狙うとかその憎む相手が苦しむ事をした後で本当のターゲットを殺しに行くわ」

（そう、屋田誠人のように…）

男性「なんだ？俺にそうして欲しいのか？」

灰原「いいえ、私ならこうするとゆう一つの論理にすぎないわ」

「仮にあなたが私への復讐としてそうゆう事を犯した時には、私もあなたを一生許さないわ」

冷静で言ってる事と態度があまりにも矛盾していて鋭すぎるその目付きに男性は一瞬怯んだ

緊急事態・探偵団編・

その頃、元太達は屋田誠人の小屋付近の森の中にいた

元太「あゝ腹減った」

光彦「もうちょっとです、あの林を抜けたらすぐですよ」

歩美「ほら頑張ろう？」

元太の手を引く歩美

元太「おっ：おう！」

少し照れながら頑張って歩く元太

三人がもう少しで林を抜けるという時：

ガサツ、ゴソゴソツ

すぐ近くの草村で奇妙な音がした

歩美「ん？なんか今変な音しなかった？」

元太「そうか？」

光彦「もしかしたら灰原さんではないでしょうか：！？」

若干笑みを溢しそう言う

歩美「哀ちゃーん！！」

歩美は少し大きめの声で灰原の名を呼んだ

すると少し後方から誰かが顔を出した

光彦「灰原さん：じゃないですね」

歩美「誰！！？」

背丈から灰原でないことが予想された

暗くてよく分からないがその人物が全身黒ずくめだということは少

し照らされた月の光で分かった

元太（く…黒づくめの…なんでだ？なんでこんなところに…）

光彦（かなり危険な状態です…、もしかしたらあの毒薬を求めてここまで来たんじゃない…これは僕達に訪れた最初で最後の試練かもしれない…）

歩美（うそ…、歩美怖いよ…、でも、でも頑張る！歩美はみんなを助けるって決めたんだもん！！！！）

三人はテレパシーでもあるかのように息がピッタリだった

最初で最後の大確保

光彦（これは…作戦Bで行きます）

元太（作戦Bの出番だな…）

歩美（さっき練った作戦Bで決まりね…！）

すると突如光彦が声を発した

光彦「あっ、工藤新一さん！」

元太「おい工藤新一！こっちだこっち」

歩美「工藤新一お兄さん！助けてー！！」

三人はその奇妙な人物の後ろを見てそう言った

その人物も不審に思い後ろを振り返る

“ 高校生探偵、工藤新一の名を呼びあたかもそこに工藤新一が現れたかのような状況を作り犯罪者にとっては大敵な探偵の方を振り向いた時に…” という作戦らしい

その瞬間…

光彦「作戦Bですー！！」

元太・歩美「了解ー！！」

光彦の掛け声と共に三人はその奇妙な人物を取り囲み元太がその人物の上に乗る光彦は両手を押さえて歩美は両足を押さえた

見事にその人物は身動きがとれずにいた

元太「おい光彦！今だ！！」

光彦「分かってます！！」

そう言うときめて手錠だけでもと思い歩美の父親、吉田の鞆からこっさり抜いてきた手枷をその人物につけた

歩美「やったあー！！」

光彦「作戦B大成功です！！」

元太「さすが少年探偵団だな！！」

こうして喜んでいるとその人物が

「あなた達…私の事をもう忘れたの？」

と…一瞬時が止まった三人

幻想の駆け巡る中で…

バーンッ…

屋田誠人の小屋の方から銃声が聞こえた

コナン「…!?!」

「博士!!! 早く!!!!!!」

博士「ハアハア…新一、先に行け!」

森の中を駆け巡る新一と博士

博士はコナンのペースについて行けずにいた

コナンは仕方なく博士を置いて灰原の搜索に向かった

コナン「灰原ー!!!!!!」

大声で灰原の名を呼ぶ

コナン「ハアハア…」

(…くそっ!!! 灰原、無事でいてくれ…)

(これじゃあ夢の中と同じじゃねえか…)

探偵団が森の中を歩いていた頃

灰原と男性は睨み合っていた

………

「哀ちゃん!!!!!!」

灰原(?!?)

突如聞き覚えのある声で名を呼ばれた

男性「君の友達か？」

灰原「…さあ？」

（ちよつと…どうしてこんなところにいるのよ！！！？危険だから帰りなさい！！！！これは私の問題なのに…）

冷静な態度ではいたがその心の内はかなり焦っていた

男性「フフツ…仕方ないみんなまとめてやってやるか」

灰原「あの子達は関係ないでしょ！！！！」

（…あっ！？）

男性「ずいぶん素直に認めるんだな？ハハハ…」

「じゃあ、まずはお前から…」

灰原の頭で引き金を引く

男性「さようなら…シェリー…フフフ」

灰原（…！！！？）

バーンツ…

森の中で一発の銃声が鳴り響いた

細やかな償い

男性はその場で倒れた

目を瞑った灰原は何故か無事だった

灰原（…！？）

目を開けた灰原の元に誰かが歩み寄る

灰原「…？」

一気に夜が開けたその時、その人物の顔が光に照らされる

灰原（…！？）

「あ…赤井秀一…」

赤井「大丈夫か？」

そこにいたのはFBI捜査官、赤井秀一だった

赤井も屋田誠人のことで気になりここへ来た

灰原と同じバスに乗っていたが灰原に気付いて一つ手前のバス亭で降りそこから徒歩でここへ来たのだった

灰原「ど、どうして…」

男性「うっ…ううー」

肩に弾が当たった男性は力を振り絞り拳銃を再び持ち赤井に向けようとしたが

バンッ！！！！

呆気なく弾で拳銃を飛ばされて男性は悔しがる

赤井「復讐は復讐を呼ぶ…」

男性に向かいそう言った

灰原「えっ…？」

赤井「復讐はまた復讐を呼んでしまう…」

「決してやってはいけない事…例えどんなに辛く悲しくても…」

「私は何度我慢してきたことか…」

灰原「!!」

すると赤井は一束のプリントを灰原に渡した

赤井「君が探しているものだ」

それはA P T X 4 8 6 9と解毒剤の調合法だった

灰原「これ…」

赤井「幸い担当の捜査官が出張中でまだその資料には手をつけていない」

「完成したら処分してくれれば持っていっても構わない」

灰原「……」

「どうして… どうしてあなたはいつも私を助けてくれるの…？」

赤井はこんな灰原に思わず驚いた表情を浮かべる

「灰原……!!」

近くの森の中でコナンの呼ぶ声がした

森の中での再会

灰原「工藤君……!!? どうして…」

「それにあの子達まで…」

赤井「私が君を助ける理由はきっと…あの子達と同じ理由だと思う」

灰原「えっ?」

赤井（だよな? 明美…）

そう言うのと赤井は森の中へ消えていった

光彦「灰原さん……!!」

やっと灰原の元に到着した探偵団の三人

灰原「……!」

その三人の後ろには見覚えのある顔があった

コナン「灰原……!!」

すぐ後にコナンが到着した

灰原「工藤君…」

コナン「えっ……!!? おめえらこんなとこで何やってるんだ……!!?」

元太達にそう言う

コナン「それに…」

? 「ハア……イ? 久しぶりね……Cool guy?」

コナン「……ベルモットまでどうしたんだ……!!?」

クリス「ノーノー、ベルモットじゃないわ? アメリカの大女優、クリス・ヴィンヤードよ?」

灰原「どうしてここに……?」

少々疑っている灰原

クリス「私も屋田誠人の事でちょっと…」

「でもあの毒薬がなくてよかったわ」

「災難だったわね？」

コナン「ああ、だいぶな？」

クリス「でも大丈夫よ？ねっ？」

と灰原に問い掛けた

コナン「まさか、あったのか！？解毒剤の調合書！？」

灰原「え…ええ、」

光彦「良かったです！！」

元太「来たかいがあったな？」

歩美「哀ちゃん、コナン君、やったね！！」

灰原「ええ、ありがとう」

実に嬉しそうな探偵団だ

真実の追求

クリス「でも、また江戸川コナンにならなきゃ気付かないこともあるったんじゃないかしら？ ねえ？」

とコナンを見て言う

コナン「…」

さっき気付いた事が何処かクリスには以前から見透かされているような気がした

元太「なんだそれ？」

クリス「ウフフ…」

と言いながら森の中に去って行こうとする

コナン「おめえはどうなんだよ？」

そう一言呼び止めた

クリスは振り向いて

クリス「: Unlike myself, he works hard, (彼は私と違って勉強家よ)」

「be still attached to a girlfriend, (恋人に未練があるみたいだわ)」

と笑いながら言った

コナン「フツ、らしくねえな？」

クリス「さすがね、私の心も見透かすなんて… でも私はあなたと違って探偵ではないわ？」

「真実を追求することはできないわ…」

そう言うのと愛らしい笑みを浮かべて去って言った

コナンは灰原の方へ歩み寄った

コナン「まったく、何考えてんだよ？」

灰原「……………」

コナン「…いい加減やめようぜ？」

灰原「えっ…？」

コナン「確かに俺はなりたくてこの体になったわけじゃねえけど、江戸川コナンにならなきゃ分からない事もたくさんあったわけだから…」

「だからそろそろ笑えよ？」

その言葉に灰原はドキッとした

見失う真情

その様子を見た光彦は…

光彦「あっ！ダメですよ！コナン君？」

コナン「へっ…？」

歩美「灰原さんは光彦君の将来のお嫁さんだよ？」

元太「そんなかつけえこと言われたら惚れちまうかもしれねえだろ？」

光彦「灰原さんだけは、コナン君には渡しませんよ？」

コナンはその迫力に少々驚いた

灰原「大丈夫よ、惚れたりなんかしないわ！それに惚れるなら夜中にここまで来てくれたあなた達に惹かれるわ？」

光彦「えっ？そうですか…？エヘヘヘ」照れる光彦

コナン（あんだよく命懸けで来てやったのに）

コナンは不貞腐れた様子で灰原は笑っていた

博士「おーい！！」

するとやっと現れた博士

コナン「博士おせえぞ？」

そして博士を先頭に皆を連れて車へと戻った

灰原（ありがとう…工藤君…）

（でも私はあなたの体を小さくした毒薬の開発者よ… それには変わりない事…）

（残念だけど… 流れに逆らえば人は罰を受ける…）

（恋愛も同じよ… だからこれ以上は無理…）

（例えあなたが来てくれたとしても… 工藤君…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8851x/>

名探偵の終着路（プロセス） ～重なったanother～

2011年11月4日12時11分発行